



十戒実践講座

第九章 むさぼってはならない／内側を清めよ。



あなたの隣人の家を欲しがってはならない。
すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、
欲しがってはならない。

旧約聖書 出エジプト記20:17



どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。

新約聖書 ルカ 12:15



アッラーの恩恵によって与えられたものを出すのを嫌う者に、自分のためにそれが有利だと思わせてはならない。いや、それはかれらのために有害である。かれらの出すのを嫌ったそのものが、復活の日には、かれらの首にまつわるであろう。

クルアーン 3:180



我執 カ 物欲 誇りを捨て
情欲と怒りから離脱し
所有意識を持たず常に平静である人は必ず
ブラフマンと合一し至上完全の境地に到る。

バガバッド・ギータ 18:53



人が肉欲にふければふけるほど、それだけ動物的・野獸的になり、靈的願望に従えば従うほど、それだけ人間的・天使的になります。

真のキリスト教 328

むさぼってはならない／内側を清めよ。

知足は、最高の財産である。(法句教15:8)

二つのむさぼり 「アモル・ムンディ：世への愛」「アモル・スイ：自己愛」

旧約聖書の聖なる物語を通して、シナイ山から語られた言葉は、「十戒」とされています。より正確には、言語のヘブライ語は二つの言葉、十という意味の「アソル」、言葉という意味の「ダバリム」よりなっており、「十の言葉」と呼ぶことができます。そのため十戒は「デカログ」と呼ばれます。これはギリシア語の「デカ」が十を意味し、ロゴスが「言葉」を意味するからです。宗教指導者の間では、この戒をどう数え、わけることについて意見の相違があるものの、十あることについて異論はありません。「そして、彼は石の板に契約のことば、十のことばを書きしるした。」(出エジプト記34:28 申命記4:13,10:4参照)とあるとおりです。*1

*1 この点、聖典における数の「十」は、完成、すべて、完全を意味しており、人間の体も十本の足指と手の指で完全となります。十本の足指は、バランスをとり、支え、行きたいところへともたらしめます：十本の手の指は、心と頭にある気持ちを内包し、表現します。そこで十戒、十の神の言葉は、人の市民的道徳と霊的生活に関する知恵のすべてを、すべて完全に含み、支え、表現します。

最古代の伝統によれば、貪りに対する戒めは、二つの部分にわかれ、二つの戒として扱われています。—すなわち第九戒と第十戒です。「あなたの隣人の家を欲しがってはならない」は、最後から二番目の戒とされ、「すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」は連続する最後の戒と見なされていました。スウェーデンボリィによれば、貪りの戒めが二つの部分に分かれてあつかわれているのは、深く霊的な意味があります。こう書いています：

泉から永遠に水の流れがわき出るように、すべての欲望がわき出る二つの愛があります。この愛は、世への愛 [アモル・ムンディ] と世への愛 [アモル・スイ] と呼ばれ・・・世への愛と自己への愛は、すべての欲望の源であり、邪な欲はすべてこの最後の二つの戒によって禁じられています。そして、九戒は世への愛から起こる欲を禁じ、十戒は自己への愛から起こる欲を禁じています。(「黙示録解説」1020:2)

スウェーデンボリィに従って、貪りを二つの部分にわけて扱います。この章の最初の部分で、スウェーデンボリィのいわゆる「世への愛」(アモル・ムンディ)を説明します。健全な世への愛—すべてのものとすべての状況に神を見、充足に安んじる—と不健全な世への愛—自分の持っているものに決して満足することがなく、絶えず渴望する—の差を見てみましょう。

同じように、この章の後の部分では、スウェーデンボリィのいうところの「自己への愛」(アモル・スイ)を説明します。健全な自己への愛—自分のユニークな才能に感謝し、同時に他人の自由と才能に敬意を払う—と、不健全な愛—自分と比較して他人をうらやみ、あるいは軽蔑し、人を操り、コントロールしようとする—の差を見ます。最終的に、アモル・ムンディとアモル・スイは他のすべての悪の根源であり、自己点検の鍵であるということがわかります。聖なる言葉、「貪ってはならない」は、私達の外側の行動だけではなく、隠れた欲望を清めるようとして、神が導いておられるのです。イエスがいわれたように、「まず、杯の内側をきよめなさい。」(マタイ23:26)

この貪りに対する戒の文字的な部分は、生き方の外的なレベルで、何を行い、何をすべきではないかということだけではなく、それ以上について述べています：それは、内側の欲望について語っているのです。つまり、今までの戒を、道徳的な行為の一般的な規則や、社会秩序を守る手段として、文字的なレベルで守ること、それ以上のことを行うよう語りかけています。もちろん字義的なレベルでそれぞれの戒は守らなければなりません、貪りに対する戒の字義的レベルは、さらに進むことを要求しています。この戒は、人の体の行動だけではなく、心と頭にある欲望を再点検するよう求めているのです。それは、単に物理的なレベルで、人を殺すことや、姦淫し、盗み、偽りの証をすることを禁じるのみならず、霊的なレベルでも同様に禁じるものなのです。内側を清めよ、と求めています。この戒めを文字通り守ってゆくことで、この世のかりそめの市民権が整いますが、同時にこの戒めを霊的に守ってゆくことで、神の王国の永久の市民権が用意されていくのです。

第一部：「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。」

アモル・ムンディ：世への愛

「貪る・Coveting」はラテン語の”cupere” から来ており、「欲する」ことを意味します。それは、猛烈に、飽くことなく求め、密かに渴望し、他人に属するものを所有しようという欲望として連想されます。貪りの情欲は、深く、そして猛烈です：私達をさいなみ、支配します。まるで、これらの欲望が満たされない限り、決して幸福にはなれないように感じます。求め、さらに求め、求め続けますが、これがその性質です。しかし、逆説のように聞こえますが、それは決して満たされることのない欲望です。その性質は、より求めて、求め、求め続けることにあるからです。ヒンズー教の聖典にあるように、「炎は、油が与えられるにつれ、燃え上がるように、欲望は、決してその喜びに満足することはない。」（マヌの法 2:94）

「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。」という戒は、世の物を所有しようという、とどまることを知らない願望について語りかけています。この世は、美しい物と素晴らしい事で満ち満ちているということに満足せず、それを自身のものにしたいと望みます。友人が新車を購入したり、昇進したりすると、それを喜んであげるのではなく、友人の幸運をうらやみます。「何故、私が新車や、もっと割のいい仕事を得ることができないのか？」と悩みます。友人が素晴らしい休暇を楽しんだり、家の増築をしたりしても、喜んであげることができません。その代わり、強い欲望がじゃまをします。自分もそれが欲しくなります。

これが、スウェーデンボリィが、アモル・ムンディの不健康な面について述べたこと—他人が持っている物を所有したがる身勝手な欲望です。次の文章をご覧ください。

この前の週末、妹と義弟がやって来ました。互いに抱き合い、再会を喜びました。

台所に入ってふと窓の外を見れば、真新しいホンダの新しいアコードが駐まっています。しばらく、欲しいと思っていた車です。

「あなたの車なの?」、と妹にたずねました。「そう!」夢中になって、妹は答えます。たちまち私は、嫉妬に襲われました。

外に出て、近くによって車を見ました。運転席に座って車のオプションをすべてチェックしました：サンルーフ・すべて電動、それにCDプレーヤー。何年も新車を持ってなかった、妹のことを喜んであげるのではなく、ただ羨みました。

私は、週に5日、一生懸命働いています。週に40時間あまりです。夫もさらに懸命に働いています。それなのに、妹は何年も働いていません。私達を買えないのに、どうして妹たちが新車を買えるのでしょうか？私達こそが新車を持たねばならない、そう思いました。先を越されるなんて、とんでもないことです。

たたずみながら車を見つめていると、妹がそっと私に腕を回します。そして、妹とその夫が、いかに長い間一生懸命働いて、お金を貯めて車を買ったか、そしてそのために何を犠牲にしたかについて説明してくれました。その車は、妹に対する愛の表現であり、妹はそれに満足しているとも説明してくれました。

わだかまりは一瞬で解けてしまいました。どうして私はあんなにどん欲だったのでしょうか。神は、金銭愛から離れて、持っている物に満足せよとおっしゃっています。自分は嫉妬という偽りの神に仕え、「貪るな」という戒を破っていたことに気づきました。私は妹を抱きしめ、そして嘘・偽りのない心から、妹のために喜びました。彼女の新車が誇らしく思えました。そして、窓とサンルーフを開けて、皆で一走りしました。神の愛があふれ、入ってきます。

このセミナー参加者は自分の感情を認め、それを「嫉妬」と名付け、克服して、妹の喜びを素直に受け入れるところまで至りました。「嘘・偽りのない心から、妹のために喜びました。」 スウェーデンボリィが書いているように、「他人の喜びを、自分の喜びとして感じること、これが愛です」（神の愛と知恵47）

けちと強欲

インドの話です。狩人が猿を捕獲するため、上に小さな穴のある木製の重い箱を用意します。その穴は、ちょうど猿の握り拳

が入る大きさです。箱の中にはバナナが入っており、これが猿を捕らえる餌です。狩人は隠れて、猿を待ちます。すると猿はやってきて、バナナのおいを嗅ぎ、手を中に入れて掴みます。猿がバナナを掴むやいなや、狩人は猿を捕まえようと、近づきます。猿は引き寄せ、引っ張り出すとしますが、無駄です。バナナを穴から引っ張り出せません。猿には、バナナを捨てて逃げてしまことは思いもつかないのです。逃げないその代償は、命です！

「[気づきを] 怠るままに行じおこなう人間の、渴愛 [の思い] は増え行く——蔓草が [生い茂る] ように。彼は、猿が林のなかで果実を求めるように、あの [世] からあの [世] へと浮きただよう (輪廻する)。」と法句教(241)にあります。猿が林の中であちこちと果実を求める様は、全く平安を内に持つことなしに、休みなく感覚的な喜びを求めて探し回る気ぜわしい人の象徴として見られます。猿はまた、持っているものを手放し逃げるのを拒むように、より多くを求めて飽くなき欲望、不健全な「世への愛」を象徴しています。

この物質的な世界で生きている限り、いろいろな形でこのどん欲にあらがう機会に会います。この形を見れば二つあります：「強欲」と「けち」です。強欲な人は、決して満足することなく、絶えずより多く得たいと渴望しています。：そして、けちな人は自分の持ちものに固執し、わけあたえることをいやがります。強欲は、物を得ようとする無節操な欲望であり、吝嗇 (けち) は、自分が一度得たものを持ち続けたいという、これも無節操な欲望です。より多くを望むのと、自分の得たものを手放すことができないのは、同じコインの裏表です。このネガティブな罠に捕らえられると、自分の〈いのち〉の内外が、がらくたに囲まれてしまいます。「強欲」は、より多くを望みますが、「吝嗇：けち」は何物も放そうとしないことです。そしてとどのつまりは、物質的・心情的ながらくたの海でおぼれ死んでしまいます。

次は、ある方がすべてを聞くことなど決してできないほど貯まったCD (コンパクト・ディスク) に囲まれた例です。

私は音楽が好きです。音楽に熱中しているといってもいいでしょう。CDが初めて世に出たとき、興奮しました。音質は素晴らしく、まるでコンサートの大会場で、最前列にいるようです！最初にCDを買ったときは本当に楽しかったものです。金曜日の給料日毎に、まっすぐCDショップに向かい、CDを2、3枚購入しました。CDのコレクションが増えて行くにつれ、もっと欲しくなってきました。そしてCDを貪り求めました。CDにすべてをつぎ込むCD中毒のようなものです。他に使うべき金もすべてCDにつぎ込みました。私は貪りと蓄財の罠にまんまと陥ってしまったのです。

この方のCD蒐集への執着は、私達すべてが持っている性向のいい例です。それは全く無邪気な趣味として始まります—CDや本、人形やコイン、ベースボール・カードや骨董品—が、貪りへの性向はたやすく開花し、すべてを消費してしまう中毒となってしまいます。自分の求めたものに取り囲まれますが、決して満たされることはなく、より求め、決して手放すことができなくなります。老子によれば、「所有の欲ほど、大きな罪はない」(道徳教1:46)

所有欲は物のあふれた国に住んでいる人たちの問題と考えがちです。しかし本当は、貧しかろうと富んでいようと、そしてどんな文化であろうと、誰であろうと起こる問題です。次は、自分の持ち物をわけあたえようとしなかったことを書いたアフリカの小さな村に住む、敬虔だが物惜しみな人の文です。

わたしの名は、ズール語で、「自分の物を求める」という意味で、それは本当に自分に当てはまっていると思います。私は物を持ちすぎ、たくさん物を貪ってきました。この状態自体が私の神といえます。「これは私の物だ」という飾りに飾られた、強烈で美しい偶像を奉じています。そして何人たりとも、私の財産を犯すことは許しません。神は物質的な物を他人に分け与えるために、私を富ませてくれましたが、私はいつも、これは「自分のもの」と感じ、誰にも分け与えたいと思いません。「自分のもの」、「私だけのもの」というラベルなしに、分かつことができるよう今、神に祈ります。

経済状況や年、宗教、国籍、そして時代さえ問わず、この貪りへの戒めは、わたしたちそれぞれに向かっています。紀元前6世紀、中国の老子は、「聖人は財を蓄えない：彼は他人のために生きることで、自らを富ます」(道徳教6:61)と教えます。心に奉仕の気持ちなしの富を積み上げ、自分のためだけに蓄えることは、すべての宗教の聖典できつく警告されています。イスラム教では：

「アッラーの恩恵によって与えられたものを出すのを嫌う者に、自分のためにそれが有利だと思わせてはならない。いや、それはかれらのために有害である。かれらの出すのを嫌ったそのものが、復活の日には、かれらの首にまつわ

るであろう。」クルアーン 3:180

新約聖書の中で、イエスは、作物をたくさんもったある金持ちが、その余った作物を蓄えるより大きな倉を作ろうとした話を語られています。話の中で、金持ちは世の所有を信頼し安んじてはならないと戒められます。なぜなら物の豊かさの内には、永遠の〈いのち〉は存在しないからです。

それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』そして言った。『どうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」(ルカ 12:16-21)

このキリスト教の話に対応する、イスラム聖典の知恵は、「財を集めて計算する(のに余念のない)者。本当にその財が、かれを永久に生かすと考えている」(クルアーン 104:2-3)と語ります。

この戒が特別に貪りを禁じていると肝に銘じることは重要です。ただ、神や隣人への愛に基づいた欲望や夢、望みを持つことは決して禁じられていません。言い換えれば、人は自分の未来に夢や展望を持てるということです。私たちは適切な家と、信頼できる車を持ってかまいません。また配偶者に、愛情関係を求めるのもいいでしょう。家族に十分な食料を求めるのも、もちろんです。合法的に、安全な環境のもとで子供たちを育てようとするのもいいことです。これは正常な望みであり、その中に「強欲」や「吝嗇：けち」はありません。

しかし問題は、正常な望みが飽くことのない欲望になってしまったときに起こります。まったくもってまともな望みが、心を焦がし、死に物狂いの望みとなってしまうときのことです。この望みは、かなうまでは決して離れません。古代の英知は、欲望すべて—ただそれを得たという渴望—に屈してはならない、と教えます。イエスは、山上の垂訓で、

自分のいのちのことで、何を食おうか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。……しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。……だから、あすのための心配は無用です」(マタイ 6:25,32,34)。この節の霊的意味を、スウェーデンボリィはこう書いています：

この節は、人は食物や衣料、そして将来に備えた富を得てはならない、とは意味していません；というのは、人は自分と家族は、自分で養わなければならない、という秩序に反するからです。しかし、明日を案じる人とは、自分の分に満足しない人のことです；神的なものではなく自分に信頼を置く人のことです；そして世の地的なことばかりを気にする人のことです。このような人は、一般的には明日のことを気にかけ、すべてのものを所有し、すべての人々を支配したいという欲望に支配されています。それらの人は、欲するものが得られないと悲しみ、失えば苦痛を感じます……

神的なものに安んじている人々で、これは大きく異なります。その人々もまた、明日のことを気にかけているようですが、実は気にしてはいません。なぜなら、彼らは明日のことはそう気にしておらず、まして不安などないからです。彼らの霊は、自分の欲しい物が手に入ろうが入るまいが、とても平静です；そして無くなっても悲しみませんし、自分の分に満足しています。もし豊かになっても、富に心をおきません；貧しくなっても、悲しみません；自分の環境が全く破綻しても、落胆しません。神に安んじる者は、すべてが永遠の幸福の状態に向かって進んでおり、一時的に何か起ころうとしても、それはその最終目的に至るための手段であると知っているからです。(天界の秘義 8478:2,3)

キーとなるところは、「彼らの霊は、自分の欲しい物が手に入ろうが入るまいが、とても平静です……(なぜなら)神に安んじているから」というところです。この人たちに、すべての欲がなくなっているわけではありません。今この瞬間にある祝

福を、奪ってしまうような余計な欲望を持っていないだけなのです。彼らは気にはしますが、心を乱しません。明日の計画はしますが、それがだめでも、捨て鉢になりません。彼らは夢を持ちますが、神が宇宙を治めていらっしゃることも明らかに知って疑いません。自分の境遇がどうであれ、「すべてが永遠の幸福の状態に向かって進んでおり、一時的に何か起ころうとしても、それはその最終目的に至るための手段であると」知っています。

靈的な所有

神聖な象徴では、「所有」や「金持ち」は、靈的真理に関して語られます。私達が、世の所有物にけちで欲が深いように、靈的な所有物に関して、けちで欲が深いことがあります。もし、偉大な靈的教えについて学ぶのに懸命であったとしたら、その中でたくさんの美しい宝を発見したはずで、靈的な〈いのち〉に関して、たくさん学び、輝く宝石のような洞察を多く得たはずで、これらはまぎれもなく「莫大な所有物」です。

しかし天界についての講義が、天界ではないように、靈的〈いのち〉の知識は、靈的〈いのち〉自体ではありません。いつも与えられる偉大な靈的な教えは、自分の荒れた心への食物に変え、有益な役立ちへのエネルギーとしないならば、それは単なるむなし事実描写にしかすぎません。「金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」(マタイ 19:24) という記述は、そうすることで自分は神の王国に入ることを許されると考え、せっせと素晴らしい知識を得ることに心を定めてしまう性向を物語っています。これに関して、スウェーデンボリィはこう書いています：

自然的な意味合いでは、金持ちとは、豊かな富を持ち、そこに心を置く者のことです；しかし、靈的意味合いにおいては、深く学び、知識に富んだ、靈的な富者が、自分自身の理知を用いて、天界と教会の事柄に入ろうとすることを述べています。これは神的な秩序に反しているため、「らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」とまでいわれています(天界と地獄 365:3)。

らくだは、知識を蓄積することを語る聖なる象徴—特に(長い砂漠の旅に使うため)細胞内に水を貯蔵し、こぶの中に脂肪をためる点で—です。らくだが水と脂肪を貯めるように、靈的知識を学んで貯めることができ、驚くべきことに「砂漠」の状態の間、生命を維持する養分に変えることができます。これが、蓄えられた知識の正当な使い方です。しかし、ただ知識を積み上げることや、その学識を誇っても、何の意味もありません。「針の穴」を通るためには、「靈的に貧しく」なければなりません。私達はいかに限られたものであれ、自分の靈的財宝を利用しなければならないのです。謙虚に神に対して、自分の旅の靈的滋養と、意義ある役立ちをする力へ変えていただくよう求めなければなりません。

これは、イエスが以下の状況で教えられた知恵です。

裕福な青年がやってきて、「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」イエスは彼に言われた。「もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」

これに対して答えられたのが、「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります……」(マタイ 19:16-21)

財産を余計に持ちすぎた人々にとって、それを売り払うのは最善の途です。しかし、ここにはより深い教えがあります。何かを「売る」とは、所有権を放棄することです。すると、それはもはや自分の物ではなくなります。同じように、自分の「善い業」が自身から来ており、自分が何かしら「所有している」、という考えを放棄しなければなりません。盗みへの戒めで述べたように、自ら行うすべて善いことは、神お一人から来ていると認めなければなりません。神は、戒めを守る限りにおいて、私達の内、私達を通して働かれるからです。そのときのみ、「貧しいものに与える」ことができます。言い換えれば、謙虚な心で、身勝手な欲望を空にし、自分の利益を清めたとき、神が与えられたものを人に与えることができます。しかし、この裕福な青年は、そうすることができませんでした。彼が自分の財産を分け与えようとしなかったことは、そのとき私達それぞれが一物質的であれ、靈的なものであれ—持っている財産はすべて神のものであることを、謙虚に認めることができないことを描いています。しかし、そうではありません。そのため、「青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。」(マタイ 19:22)と続きます。

天の宝

貪りを認め、克服するに当たって、身勝手な欲望と、物質的な面に結びつけているすべての付着物を捨ててゆくことを、徐々に学びます。イエスが言われたように、

自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。(マタイ 6:19-21)

イエスは、「隠された宝」について語られました。—それは目では見ることができず、耳で聞くことも、触ることもできませんが、この世がもたらすことのできるものの、どれよりも豊かなものです。イエスは、「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います」と語っています。(マタイ 13:44)

この「隠された宝」は、自分の〈いのち〉に何が無いかということから、自分の〈いのち〉に何があるかと観点を定めるたび、浮き上がってきます。参加者の文です：

今朝、駐車場に車で入ろうとしたとき、見事な車（BMW、レクサス、ベンツ等）が、駐車場にずらりと並んでいました。駐車場の各階を上ってゆくと、まるで車たちが、それぞれ「俺をみてくれ！素晴らしいだろう！」と語りかけてくるようです。通常私はそんなことを気にしていませんが、今回は、この車はいくらするのだろう、どんな人が持っているのだろう、と考えていたようです。

このいかにも物質的な物に心を向けながら、自分が隣人の財産を「貪っている」ことに気がつきました。神が勧めるものより、この世が勧めるものを自分がみつめ、欲望を自ら積み上げているのがわかりました。私はただその車を無視して、思いつくことすらしなければいいとわかっています。私は自分に向かって、「まず神のみ国を求めよ」と言い聞かせはじめました。

駐車場の三階を回っていると、重い障害を負った若い男の人がいました。その人は、二本の松葉杖を力まかせに使いながら、文字通り、ビルの中に自分を引きずってゆきました。神が、この瞬間、私のためにこの状態を備えてくれたと、気づきました。私は他の人々に比べて、全く何も欠けるものはない、ということに気づきました。神は、瞬時の内に、私の人生に何が「欠けている」かから、何が「ある」かに視点を向けさせたのです。すべての祝福の源である神を、ほめたたえよ！

このセミナー参加者が発見したように、天の宝は私達それぞれの内にあります—ただ、それを得るためには、この最後の戒を、霊的に実行しなければならぬのです。私達は貪ってはなりません；神のご意志に自らを服従させなければなりません。神は欲望を取り除き、「見えない宝、アツラーのみがご存じの宝」(クルアーン 6:59)に変えられます。

「天の宝」は生活のなかに埋もれてしまっているかもしれませんが、あわただしい生活のため、それを見ることも、または感謝することもできません。無数の約束や活動、会合やアポに圧倒され、息をつく時間すら持てません。私達はものすごい勢いで、息子のサッカーの試合から、歯医者予約に飛び、そこから新しい靴を買うためにデパートに移り、食料品店で、冷蔵庫のストックを買い求め、現金を引き出すため銀行がシャッターをおろす前に飛び込みます。生活は、行うことであふれかえっていて、そのままでもいい—十分であるものや、感謝する時間は、ほとんどありません。より多くのことを成し遂げようと欲張り、日々のスケジュールを行うことと、行く場所で埋め尽くします。そして、静かにじっとして、心を落ち着け、今現在私達のために積み上げられている喜びやたくさんの方に感謝することよりも、自分の目的を達成することが大切であると信じています。この点、以下の9歳の少女の知恵を見てください：

おばあちゃんたちは、そこにいるだけで何もすることがありません。散歩に連れて行ってくると、きれいな葉っぱが落ち、幼虫が進むように、ゆっくりと歩きます。決して、「急いで」とは言いません。何か読んでくれるときでも、読み飛ばしたりせず、また同じ話を何回でも気にせず読んでくれます。みんなおばあちゃんをもつべきだと思います。特にテレビがなければそうです。なぜなら、時間がある大人は、おばあちゃんたちだけだもの。*2

*2 「おばあちゃんて、何？」 ロスの子供病院内報として発行され、「パーク・ニュース」で再掲。

自分の目的を達成しようとしてあわただしい中、私達は天の宝を見逃します。マハトマ・ガンジーは、かつて「人生には、ス

ビードをあげなくてもたくさんのもがある」と観察したことがあります。自分の心が常に次に行うべきことだけを見つめていると、たった今存在しているはずの宝に気づかないことがあります。子供を体育教室に連れていきながら、明日やってくる配管工のことを考えることもできますが、子供と今会話して、絆を強めることもできます。今現在に満足することは、ささやかな贈り物であり、そして発見されることを待っている天の宝です。それは、貪りを捨て、神に満足する範囲で、誰もが得ることのできるものです。

この戒のこの部分の学びを通して、貪りは、世の物への所有欲を捨てきれないでいることであると見てきました。その本質は、神への信頼ではなく、物への信頼が勝っていることです。旧約聖書にあるように、「ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう」（詩編 20:7）。イスラム侵攻の聖典では、「この世の生活の栄華に、あなたの目を見張ってはならない。・・・あなたの主の賜物こそ至上でまた永続する」（クルアーン 20:131）。神に安んじ、神の導きを信頼し、神のご意志を行うのは、まことに、大きな宝です。スウェーデンボリィもこう書いています、「平安とは、主はすべてを支配され、すべてを与えられ、すばらしい結果に導いていただけると、主に信頼を置くことです」（天界の秘義8455）。

地上の宝と、天の宝の喜びとを区別することを学ぶのは、ゆるやかな過程が必要で、私達の大部分にとっては、一生かかるものです。儒家が言ったように、人には守るべきものが三つある；若いころは、肉体の欲を慎まなければならない；中年においては口論を慎まねばならない；年老いてからは、貪りを慎まねばならない（論語16:21）。何故貪りに対する戒めが十戒の最後にくるかが、ここに語られています。またインドの聖典が、世の物への執着に勝つことは、仁政で最大で最後の戦いであることを教えます：「渴愛を離れ、執取なく、・・・なら、まさに、彼は、最後の肉体ある者（解脱者）であり、大いなる知慧の者と呼ばれる」（法句教24:19）「一切を捨てた者、渴愛の滅尽〔という境地〕において解脱した者は、誰を〔師と〕定めよう」（法句教24:20）

世のものは、楽しみを与え、物質的な生活を維持するために必要なものです。この贈り物に感謝する一方で、これを生活の中心としたり、自分の幸福や、安全そして、自己の価値がどれだけ持っているかによって決定されてはなりません。自分の心にある欲望を点検し、物を得ようとする貪欲を捨てることで、霊的な財宝と天の宝が目の前に開かれます。

第二部：「隣人の妻、あるいは、その男奴隸、女奴隸、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

アモル・スイ：自己愛

貪りを戒める命令は、「あなたの隣人の家を欲しがってはならない」で始まります。物質的な「家」が世の物を所有し、蓄積しようという愛だということを論じてきました。この戒の次の部分は、「隣人の妻、あるいは、その男奴隸、女奴隸、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない」（出エジプト記 20:17）です。

他人の物質的な持ち物を貪ってはならないのはたしかですが、この戒の第二の部分は、隣人の家からさらに内部のものに向かいます。この戒の、「家」の部分は人の心を表しています。ちょうど、人が家に入り出すように、思考と感情は心に入りします。そして人が家に住むように、人は概念をもち、そこに住みつきます；そしてちょうど人が住まいを定めるように、ある心の習慣を身につけ定めます。この心の習慣—思考と感情のおきまりの道—は、心の住まいと、霊的な住居となってゆきます。ダビデの詩にあるように、「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」（詩編 23:6）。

この戒は私達それぞれに語りかけており、既婚・独身や、奴隸・家畜や他の財産を持っているかどうかは関係ありません。人の心と〈いのち〉の、大切に現実の局面について語りかけています。聖なる表象では、妻は人の最も深い愛と、最も高い願望、そして大事にしている価値を意味します。「男奴隸」は、合理的な思考や信条の体系を；「女奴隸」は、その思考と信条に関連した感情を；「牡牛」と「ろば」は、〈いのち〉の最も外のレベル—言動—をあらわします。

これは内的な戒めであるため、内なるものを貪ることについて述べています。隣人のもつこれらの物を貪ってはならない、という主の警告は、他人の感情や思考、そして行動に、自分の身勝手な支配力やコントロールを働かせてはならないことを意味しています。スウェーデンボリィによれば、他人の家（心）の内側にあるものを貪る、とは、「他人を、自分の権威や命令で支配したいという欲望・・・この戒めは、自己への愛（アモル・スイ）に関したものであり、特に他人を支配したいという愛」であるとしています。*3

*3 スウェーデンポリィのラテン語では、” amorem imperandi” となっており、命令しようとする愛や、命令的な規則を働かせることを意味しています。ここでは「他人を支配しようとする愛」と訳しています、（黙示録解説1022:2参照）

愛する者を支配する

貪りを戒める命令は、他人の感情や思考、そして〈いのち〉を受け入れ、尊重させようとしています。人が自分の意見を述べるのは自由ですが、人に自分の愛する物や、自分の信じるもの、行ってほしいことを、強いてはなりません。家庭内で、家族に対して、コントロールしないようにすることは特に難しいことです。次の文は、娘がした職業選択を受け入れようと悩んだ、ある父親の自己コントロールについて語っています。

娘が看護婦になるため勉強したい、と言い出しました。最初、私は、娘は気がおかしいのではないかと疑いました。アメリカでは、そこはエイズの温床です。自分がほとんど病に倒れるほど、大反対しました。眠れぬ夜が続ききました。若くて美しい、大事な娘です。娘にふさわしくない病気で死んでしまうなんて、とんでもないことです。娘がそんなふうに命を捨ててしまうことを許す父親など、いるはずがありません。私は娘を愛していますし、何が娘にとってベストであるか知っています。

娘に思い直すよう説得していると、直ちに説得をやめさせることを言い出しました。「ねえ、お父さん」、「私が看護婦になるのは、神様のご意志だとしたら、どうします？」 突然、私は、正しくない方法で娘を支配して、娘の人生を貪ろうとしていたことに気がつきました。結局、娘は神の直接の求めに応じて、看護婦になりたいのです。私の抵抗は終わり、思い直させるようとはしませんでした。これで決着です。

自分の子供の人生を支配しないという課題は、別の参加者の抜粋にもあります。なじみのある話—子供に部屋をきれいにさせるという話です：

メモリアルデーが始まりは、くつろいだ、いい日でした。家族で家を片付け、残った時間は休むなり、気分のしたいことをやろうと、皆で決めました。その後、息子の部屋の前を通ると、自分の目を疑いました。二日前、息子は部屋を掃除したばかりのはずです。しかし、今見れば、まるで竜巻が通った後のようになっています。私は、「自己制御」をいつも大切な問題と考えており、豚小屋のような生活とは、おさらばしたいと、心に決めていました。また私は先月、一月かけて、家の内側を塗り、壁紙も貼り替えたばかりなので、想いはひとしおです。自分の家をよりよくみせようとして、がんばった自分の努力を無駄にしたいとは思っていません。

ただちに息子が部屋に戻って、部屋を掃除してほしい。腹も立っていたので、家族全員に私の思いを徹底しようとも思いました。家族のいる部屋に入ろうとすると、息子はなにかくだらないことをしています。さあ、怒鳴りつけてやろう。しかし、言葉が出る前に、ふと思いとどまりました。支配してはならない、という課題を思い出したのです。セミナーでの討論と、戒を守らなければならないことにも思い至りました。この瞬間、私はそれを犯そうとしていたのです。私は自分を制御せずに、息子を支配しようとしていたのです。

外に出て、車に向かいながら、今起こったことを考えてみました。神と話すことで、いらつきが去り、物事がより明らかに見えるようになってきました。自分がまだ幼くて、子供だったころのことを考えてみました。そのころの関心は、掃除などではなく、面白く楽しいことばかりに夢中でした。それがわかり、私は家にもどって、息子と優しく話し合うことができました。すると、互いの感情を傷つけ合うことなしに、息子は部屋を掃除してくれました。私も、この戒を守ることができました。

自分が他人に対して、自分が見るように、物事を見て欲しい、自分の大切なものを大切にしてほしい、自分の信じるものを信じて欲しい、自分が望むことを行って欲しい、というような願望は、自分の思考や感情だけが大切であるという幻想を創り上げてしまいます。自分は宇宙の中心であるように感じ、他人はすべて、またそしてすべての物事も、自分の必要なものに仕えるべく創造されている、と感じます。この自分は他人よりも重要だと見なす傾向は、注意深く点検し、正直に評価しなければなりません。そのため、その主要な特徴を知っておくことが重要です。主要な特徴とは、自分の思考は他人のものより正しく、自分の意見は重要で、自分の感情はより深いものであるという妄信的な確信です。事実、これが極限までゆけば、この特徴は、自分だけが全く重要であり、他人は自分の利に仕える以外にはほとんど、いや全く価値がないとしてしまいます。自分だけが人生という舞台の中心にいて、自分だけが働いており、注目や喝采もすべて自分に集まり、他はすべて脇役でしかありえないとします。

「自己中」の人間にとって、他人などは、感情や思考、いや〈いのち〉さえ持たない幻や陰にしかすぎません。妻の意見に価値を見いださない夫や、従業員は会社の利益のためにだけいると考える事業主や、患者の感情をおろそかにしている医者、これらの人々も状況は変わりません。他人は、相対的に「無」と見られてしまいます。他人を見下し、他人の感情を軽く見る性向に関して、スウェーデンボリィは、自己愛に生きている者は、「自分だけが生きており、他人は幻にしかすぎないと見ています」（神の愛と知恵144）と語っています。

次の例では、父親が自分の息子は自分のクローンではなく、自分の考えと感情をもった若い男であると気づいた例です。：

16歳になる息子に、庭にある古い小屋を直して使う許可を与えました。何年もの間、使っていない小屋でしたが、まだ電気は仕えるようです。息子は、たくさんエネルギーを費やして、小屋を片付け、数週間のうちになかなか良くなりました。

しかし昨晚、小屋の中にいる息子は、なんとテレビを見ているではありませんか。実は家には、テレビ視聴時間・番組の内容に対して厳しいルールを設けていて、子供がテレビを持つことも許していません。庭小屋にテレビを「密輸」するなんて、とんでもないことです。息子がテレビを見ているのを見て、私の心は沈みました。「あいつは私に逆らった。与えた権利を濫用した。」そう考えて、本当に腹を立てていました。小屋のドアを開けると、中に入って言いました、「よし！それを消して。そしてここは閉鎖だ」。息子はテレビを消して、私と一緒に外に出ました。

私達は攻撃し合いました。私は、息子が反抗的・身勝手、そして自分のやりたいことしかやらないと述べます。息子は、私が自分を「完全」に自分の型に入れてしまおうとして、コントロールしようとしていると述べます。「あなたは、僕を自分だと思っている」、「でも僕はあなたとは違う。僕は外に自分を見つけなければならない」。

たしかに彼の言い分はもっともです。しかし、私は腹を立てていたのです、それを受け付けることができません。それは勝者も敗者もない、無意味な戦いでした。こうしていても何にもならない、そう思い、こう言いました、「明日、話をしよう。しかし私がいいと言うまで、この小屋の使用はならない」。

その夜と次の日、私はこの問題をじっくり考えることができました。父親としては確かに、家族の生活のために妥当なルールを設け、それを通用させる責務があります。私達には他の子供もあり、私が立てたルールの中にいなければならず、ある子だけに例外を設けるのは不公平です。しかし、息子は成長し、より自由が必要で、ある番組などは小屋でテレビを見てもしかる場合がある、そう気づきました。この問題を話すときが来て、明らかに息子のほうもじっくりと考えてきたようです。息子は言います、「父さん、考えてみたよ。あそこで二日間テレビを見たけど、全くくだらなかった。僕にとって必要ないものだと思った」。

驚きました。そして彼の言うとおりにしてやろうと思いましたが、自分のコントロールを弱める方向に持ってゆく必要があると結論しました。「そう聞いて、うれしいよ」、「でも、これから特別の時には、テレビを見てもいいのではないかと思うようになった」と言いました。息子は顔を輝かせ、問題は片付きました。息子は残りの一日を、自ら芝生を刈り、庭木を刈りそろえ、雑草を抜いていました。私はといえば、「貪らない」ことで多くを得ました。特に息子の状態や考え、行動を支配するのをやめたことで、多くが報われました。特に私達の間には、そうでした。そう自分が神を演じてはならないのです。そうすれば、たとえ息子が私の戒命に従わなかったとしても、良い関係を続けることができます。

この父親は、「家族のルール」を通したいという願いと、自分が神の命令に従わなければならないという必要性の間に、異なる世界があることに気づきました。息子は父親の像以上のものであることに気づき、息子はかけがえのない存在であり、神の似姿と像に創造された、貴い人間なのだということです。

次は、障害を持った娘をコントロールしたいという願望、これを克服する内的世界の戦いを描いた潔い父親の例です：

私は、心に障害を持った娘の父親です。娘は論理立てて話すという、通常の力を持ち合わせていません。しかし話したいという強い衝動に襲われるようです。突如、会話に割って入り、今までとは全く関係のない話題について語り始めます。

娘がそれをしようとする、いかにも悪魔的な怒りが、脊髄を上ってやってくるのを感じることができます。その寸前にさえ、

私は自分がどう反応しようとしているか、すなわち、娘を傷つけることを口にしようとしているのかがわかります。どうして私は、口をつぐんでいることができないのでしょうか。私は、娘がたとえ好きなことを言ったとしても、たいした問題が起こらないのはわかっていました。それなのになぜ、私はその「場」をコントロールしようとしているのでしょうか？

娘は24年間、何度もこうしてきましたが、娘は何も悪いことをしようとはしてないのを、心の中ではわかっています。娘は、ただ受け入れてもらいたいただけなのです。娘はグループの一員となりただけなのです。そうしても、全く問題はありません。

今晚、友人を訪問していましたが、娘は突然会話に加わり、今までの話題とまったく関係のないことを口走りだしました。しかし、今回の私の反応は異なっていました。私はただそこに座り、成り行きをコントロールしようとしませんでした。娘の話が終わるまで待っていました。娘を抑えようとするかわりに、自分の口をコントロールしました。うまくゆきました。私が自分の子を受け入れ、その語ることを抑えつけないよう、神に祈りました。

この父親は、娘を抑えるより、「自分の口」を抑えたほうが懸命であると、心を決めました。ヒンズー聖典には「戦場において、百万の人間に勝利するかもしれない。しかしながら、一つの自己に勝つなら、まさに、彼は、戦場における最上の者である。」(法句教 84)。同じように、旧約聖書では、「怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は町を攻め取る者にまさる。」(箴言16:32)とあります。

前の文では、自分の子のことで、余計なコントロールなしに子を愛し、十戒を守ろうと努力する個人の内面を除くことができました。次は、妻が仕事を始め、家にいる時間が限られてきたことに悩む夫の例です。

私には新しい車はいりません、大きな家も、高価な服も、自動車電話もいりません。しかし、私は、家族の強い結びつきを求めています。私は自分が大黒柱であり、妻は家事に専念するべきだと思っています。古くさいと思われても、そう思っています。

今年、妻が夏休み聖書学校の指導員になりたいと言ってきました。妻は、計画を練り、次の週に備えた用意をするため、遅くまでがんばっています。妻はクリニックも学んでいて、教会でもクリニックをしています。聖書学校を成功させるために、一から万事、手配しようとしていました。

私はパットの努力を誇らしく思いましたが、私のための時間が少なくなり、嫉妬もあって、それを求めました。自分のあったことでも、彼女にあったことでも、そして何であれ、話したいと思ったときにも、妻は忙しく、不満です。夕食さえ時間がないので準備できないでおり、不満です。悩みましたが、妻のやっていることは、神の王国のために重要なことだからと、心を納得させました。妻の奉仕と勤勉を見て、私の日々の用を足してくれないと不満を漏らす自分が恥ずかしくなりました。妻の重要な仕事が充実しさえすれば、私の用事などはかまわないと思います。*4

*4 「誰かがいないのを寂しがること」は必ずしも「貪る」ことではありませんが、そうであるときもあります。基本的な人間の欲求(配偶者と一緒にいたい)は、意志の疎通のためにはいいことで、抑え、否定する必要はありませんし、単に「貪っている」と片付ける必要もありません。

聖なる意義

貪りに対する戒めは、より深く理解を進めれば、すべての人が誰も聖なる重要性をもっていると理解するよう要求しています。なぜなら人は皆、神の子であるからです。互いに仕え合うことで、神に仕えることとなります。国家の要職にある人間は、「公僕」と呼ばれ、その仕事は、個々人の自由と尊厳が守られ、貴ばれるよう統治するといったものです。「支配者の最大の義務は、臣下を守ることである」(マヌの法典7:144)。簡単に言えば、公の仕事は一たとえどんなに特権的であっても一他人の上に「権力をふるう」ものであってはなりません。仕えねばならないのです。イエスが弟子たちに言われたように：

あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。(マルコ 10:42-43)

私達それぞれは、自分の家族、共同体、そして世界に特別ではっきりとした貢献をするために生まれています。そのため、人々の間で比較をするのは、意味もなく、無益なことです。服従関係は意義のあることもあります、しかし次の真理は変わりません：人の上に人はおらず、人の下にも人はいない。私達のそれぞれに、特別の場と使命があります。これが神の眼には、私達それぞれが「ご自分の宝」（詩編 135:4）とされているかです。誰かが、素晴らしい才能を持ち、社会で重要な地位につくかもしれませんが、実は全員が、全宇宙の人類の家族の中で、大事な役割を持っているのです。体は一つでも、たくさんの部分にわかれ、そして、世界や共同体は一つでも、たくさんの人からなっているとおりです。

さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。

そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。

また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。・・・もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。（コリント人への手紙 一 12:4-6, 21-23,26）。

共同体や学校、宗教組織、企業、家族が霊的原則に従って組織されているのであれば、羨みや、嫉妬、競争はありません。それは、全員のための場であり、各自は自分の居所を知っています。それぞれ全員が、いわば、中心であり、全員の貢献が重要であり、評価され、貴ばれるものです。仕えられるためではなく、より高い目的に仕えるために、人々は集まることを、人は知り、理解しています。そんな状況で、すべての仕事は重要であり、学校の掃除夫であれ、フロントの受付であれ、会社の社長であれ、運動場の水まきであれ、関係ありません。ゴミ収集人がストを行えば、ゴミは積み上がり、伝染病は広がります。そうなれば人は、ゴミ収集の働きは、ワクチンを発見する科学者の研究や、それを処方する医師の仕事に匹敵するものと認めます。

人間すべての聖なる重要性は、すべての人間は、この世と来世ともに、神的な目的に仕えるため生まれたという霊的な法則に基づいています。それぞれ、そしてすべての人が、自由な意志から行うことで、この神的な目的に仕えることが許されています。神的なものがかに世界に、明らかにされ、そして存在するにいたるかが、ここに示されています。ヒンズー教典にあるように、「そして すべての生物のなかにひとしく至上主が住んでいる。必滅の体のなかにあるこの不滅なるものを知る人は まことに存在の実相を見ているのだ」（バガバッド・ギータ13:28）。ウパニシャッドでも同じ英知があります。「異なった形の物体が燃えても、同じ炎が違った形をとるだけであり、至上主も同じように、存在しているすべての被造物のうち形を取られる」（カータ・ウパニシャッド2:2）。キリスト教の聖典でも、「あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、・・・あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」（マタイ 25:35,40）

愛の力

貪りを戒める戒は、今まで見てきたように、ただ所有をしないということだけではありません。支配をしないということでもあります。これは困難な業であり、自分が「正しい」と確信しているときは、特にそうです。そこで、謙虚なところを育てることが、絶対的に不可欠です。自分がすべてに対して回答を持っていない、と認めることが不可欠なのです。この世には異なった見方があり、人は違ったものを必要とし、趣味や好みも違っていて、異なる考え方があると気づかねばなりません。

この文脈で、「貪ってはならない」という言葉は、自分の所有物（アモル・ムンディ）を喜んで分け与えるだけでなく、自分の意見だけが、唯一の意見であり、自分のやり方だけが唯一のものである（アモル・スイ）という信念とも、たもとを分かつたねばなりません。簡単にいえば、この戒は、他人の見方を受け入れ、人の意見に耳を傾け、他の選択肢も許さねばなりません。紀元一世紀に、ルキウス・セネカは、ローマ元老院にこう語りました。「相手方の話を聞かずに、事を裁く者は、たとえ正しく裁いたとしても、公正とはいえない」。

最も重要なのは、この戒は、神の立場に耳を傾け、神がすべてを成就されている隠れた道を認めることを求めています。旧約聖書を読めば、「天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思い

よりも高い」(イザヤ55:9)。

今まで指摘してきたように、この戒は人の〈いのち〉の外側の行動を点検するだけでなく、内にある考えと願望も同じく点検するものです。新約聖書では、イエスは外側の〈いのち〉で迷ったすべての者には、素晴らしい慰めの言葉を与えられました；しかし律法学者やパリサイ人には一戒の字義的な教えを守っていた—イエスの言葉は、全く慰めどころではありませんでした。「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです」(マタイ 23:25-26)。ここで、イエスは、パリサイ人の独りよがりを責められており、それは、戒の外側の教えに厳格にこだわり、それで自分たちの救いは確実だと信じ切っていたからです。イエスは続けます。「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいなように」(マタイ 23:27)。彼らに対する訴えは、私達一人一人に対するものと同じであり、次の言葉に集約されています。「目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります」(マタイ23:26)。

杯と皿の「内側を清めよ」とは、戒に反するすべての感情、すべての衝動、すべての考えを認め、うち捨てよということです。そしてそれは、あらゆる身勝手な欲望、他人を支配したいという望み、賛意を得たいという願望、そして自分の好きなようにやりたいという執拗な熱意を克服するものです。私達はたった今、そんな局面—失業通知を受け取ったり、家族の誰かが致命的な病になったり、あるいは他の好ましくない環境になる等—にいないかもしれませんが。しかしながら、そんな環境や状況にいるかどうかにかかわらず、愛と知恵の神が全宇宙を統べていらっしゃるという、喜ばしい保証に安んじることが出来ます。スウェーデンボリィが、「そこから何か善いことが生まれぬ限り、何事も、ほんの些細なことも起こりません」(天界の秘義 6574)。バガヴァット・ギータにも麗しい約束があります：「わたしを想い、慕っていれば、わたしの恵みで全ての障害が除かれる」(1858)。

貪りに対する戒めは、〈いのち〉の内側を清めることです。自分を駆り立て、支配している欲望や、願望を認めることです；それらを自分の心から取り除いてくれるよう、神に求めることです。事実、それは貴い願望や、高貴な考えに満ちた、新しい心や霊を、神にお願いすることです。決して求めすぎではありません。本当は、これは神が約束されたことで、こう書かれています、「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。」(エレミヤ 31:33)；「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。」(エゼキエル 36:26)；「わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。・・・わたしはあなたがたをすべての汚れから救い」(エゼキエル36:27,29)と。「終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る」(使徒行伝2:17; ジョエル2:28-32参照)。まことに、聖ならない願望や、高貴でない考えを取り除くことを助けるよう、神に求めれば、神は新しい願望と、新しい考えと共に流れ入ってこられます。「主に信頼して善を行なえ。・・・主はあなたの心の願いをかなえてくださる」(詩編37:3,4)とあるとおりです。そしてスウェーデンボリィも書いています。「肉の欲にふける限り、人は獣であり、野獣です；しかし霊の願望に喜びを見いだす限り、人は人間そして天使となります」(真のキリスト教 328)。

肉の欲求には、怒りや他人に向けて抱く復讐心をも含みます。—これらの感情は、人を離れさせ、分けてしまうからです。しかし、人が内を清めれば、神は霊の願望を与えてくれます：分かちより、和解させ、殺すより〈いのち〉を与える願望です。肉の欲望は、姦淫的な関係に駆り立て、結婚を卑しめ、神との誓いを破ります。しかし内側を清めるなら、神は霊の願望を与えてくれます：結婚を貴び、優しい心で教し、忍耐と同情で困難を乗り切ります。肉の欲望は、自分の業に、大それた誇りをもたらし、他人よりも優れたものと感じさせ、最後には、神に正当に属するものを奪ってしまいます。しかし、内を清めるなら、神は霊の願望を与えてくれます：賞賛と栄誉はすべて神おひとりに属すると、謙虚に認めようとする願望です。肉の欲望は、隣人や自分自身や神に対して、偽りを証しします。しかし内を清めるなら、神は果敢に真理を語りたいという心を与え、聖典を通してくる真理の力で、偽りの証しを打ち負かします。

十戒を喜んで守ろうとする限りにおいて、この世は、神の王国であることがわかり、神の法によって治められ、神の力によって支配され、神の栄光にあふれていることがわかります。イエスが荒野で最後の試練に向かわれたとき、悪魔は「この世のすべての国々とその栄華」を与えようとしてきました。それは最後の試練でした：「この世のすべての国々」は、世界が与えることのできる物質的な喜びのすべてを表し(アモル・ムンディ)；「その栄華」は、過去最大の力と栄誉を意味しました(アモル・スイ)。「これを全部あなたに差し上げましょう。」悪魔は語ります、「もしひれ伏して私を拝むならば。イエスの答えは、幾世紀を超えて、鳴り響きます：「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある」(マタイ 4:9-11)。そこで、主の祈りの最後の部分は、この言葉で締めくくられます。「国と力と栄えは、とこしえにあな

たのものだからです。アーメン」。

この最後の戒めでは、天界に至る生活を体験すべく導かれます。世への愛に打ち勝とうと努力する内に、世への愛を発見します；愛の力に打ち勝とうと努力する内に、愛の力を発見します。そして究極的に、そして深く、宇宙を支配している神とは、愛と知恵の神であることを知るようになります；私達それぞれを深く大事にしてくれる神は、今いまし、永遠に存在します。偉大なる万物の創造の神であり、贖い主であり救い主であり、すべての人の真の神であり、すべての信仰とすべての地にある、ただ一人の真理の神です。

課題；「私はこれを行わない」

これですべては完結し、最初の靈的訓練にまで戻ります：ただ一人の真の神がいる。そして私達は、最も専制的な偽りの神を認めます—自分自身です！宇宙を駆け回らず、人々が感じ、考え、行うように支配しなくて済むとは、なんと素晴らしい安息を発見できたことでしょうか。ついに私達は、王座を離れ、道を変えて、神を神たらしめます。私達の課題は、自分自身の家を、杯と皿の内側を清めることで、整えることです—すなわち、十戒に反する、あるとあらゆる欲望を認め、捨て去ることで。何かか心に存在するたび、それが世への無節操な愛（アモル・ムンディ）から来ようとして、自己への節操のない愛（アモル・スイ）から来ようとして、ただこう考えなければなりません。「私はこれを行わない。なぜならこれは神の命令に反しているから。」そのとき、神から貴い考えと愛の情愛が流れ入ってくることに注目してください。これが、天のみ国です。

課題

内を清めよ

すべての環境を、十戒を守る機会ととらえてください。

この戒を守ることによって得た経験を、文章に記してください。

さらなる熟思と適用へのヒント

瞑想：「国と力と栄えは、とこしえにあなたのもだからです。」

これは、神の全知と全能と、偏在に心を向けて瞑想することを含んでいます。これは、神はすべてをご存じで、すべての力をお持ちで、私達すべてに永遠に存在されていることを認めることです。この言葉、「国はあなたのもだからです。」を心に置いて、物質的なものはすべて神のものであることを認めましょう。そうすることで、物を所有したいという欲望、その執着を、そのままほっておきましょう。

次に、「力と栄えは、とこしえにあなたのもだからです。」という言葉を心において、力と栄誉はすべて神がお持ちであることを認めましょう。そうすることで、他人の愛や信じるもの、行うことを支配しようという欲望、その執着をそのままにしておきましょう。毎日数分この文句「国と力と栄えは、とこしえにあなたのもだからです。」に心をとめる時間をとり、これを思い出しながら、すべての欲望と執着をそのままほって置き、神に永遠の信頼を置きましょう。

文章作成による瞑想

生涯で、何かが欲しくて。あるいは求めて必死になったときのことを書いてみます。今なら、これをどのように「貪り」として書くことができますか？それを得るために、何をしましたか？うまくゆきましたか？

瞑想：「天の雲」

神の存在とその方向を、聖典を通して求めましょう。神を求め、心を尽くして神のご指示を求めます。他には何も求めません。旧約聖書にあるとおり、「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために」(詩編27:4)。これが、「人の子」(神的真理)が、「大能と輝かしい栄光を帯びて」、「天の雲」(聖典)に乗って、やってくることです。(マタイ 24:30)

活動：がらくたを片付けましょう

「がらくた」という言葉で、自分の人生を点検してみます。あなたの家に、必要のないガラクタで一杯になった屋根裏部屋や、クローゼットやガレージや、部屋はありませんか？何かを捨てるとき、いやだったこと、そしてしれがあなたの人生に積み上がるのを許しませんでしたか？ガラクタをコントロールし、管理する手段として何かやってみましたか？それともその所有物と別れないため、「大きな小屋」を作りましたか？貪るなかれという戒めに関して、自分の家と人生を注意深く、振り返ってみましょう。何が本当に必要なか、何を売り払い、捨て、そしてあきらめることができるのか、考えてください。そして実行です。リーマーケットに出すか、慈善事業に寄付するか、捨ててしまいましょう。ガラクタを捨て去りましょう。

活動：「語り合い」(グループ活動)

- 二人の組になります。自分が誰かに支配され、操縦されていたことを順に一分間、話しあいます。(名前をだす必要はありません。経験を話すだけです)
- パートナーを変えます。大切にしてくれたが、支配し操縦しようとしなかったことをについて順に一分間、話しましょう。
- またパートナーを変えます。自分が他人を支配し、操縦しようとしていた方法について、同じように話します。例えば「沈黙によって」、声を荒げることによって、すねることで、等。
- 最後にパートナーを変えます。他人を支配し、操縦しなければ、あなたの行動はどんなふうになったでしょうか？これについて同じように語り合ってください。

活動：支配と執着と不安、これをほっておくことを学びましょう。

私達の時間は、他人を支配し、人生の中で何を得ることができるかに費やされています。この戒めは、「くつろぎ」、「ほっておく」という神の許可を与えてくれます。この戒を守りながら、信頼と受容の霊的な鍛錬を行います。正直に生き、〈いのち〉の舞台の中に神のご意志からくる動きを行います。そして、他から生じる熱望と不安は、ほうっておきます。支配の熱情を捨て去りましょう。

瞑想：アモル・ムンディ と アモル・スイ

アモル・ムンディ（放縦な世への愛）とアモル・スイ（放縦な自己愛）の差を明確にすることで、自己点検に有意義な概念を得ることができます。自分の決定のほとんどが、純粹に利他的で無視の動機から出ていると信じる一方で、放縦な世への愛（物質的な利得への欲望）、あるいは、放縦な自己愛（評判と名声、そして力を強めたいという欲望）によって、汚されることが可能です。例えば、博士号を得るのは、最高の仕事をするため、その分野で可能な限りの知識を得たいためかもしれません。しかし、人は割のいい仕事を得ることを第一として（アモル・ムンディ）これを求めることもできますし、名声と権力を得るために（アモル・スイ）求めることもできます。同じ事が、スプード違反の切符について、文句をいうかどうかについても出てきます。大金を払うことに腹を立てているのか（アモル・ムンディ）、評判を落とすたくなくて、自分が法律違反をしたことを知られないようそうしているのか（アモル・スイ）。これらの言葉を靈的な区別をする用語として用いながら実践していると、低い動機—名誉への愛、評判そして利得—これは下に下がり、高い動機が浮き上がります—他人への奉仕の気持ち、自己の利得や報酬を心に介さない動機です。

活動：靈的宝探し

不安を抛り捨て、今現在に感謝する気持ちを持ちます。友や家族と、学校や仕事や、運動や買い物にゆくためドライブするとき、一緒にいる人に注目しましょう。あなたが運転していても、はたまたただ乗っているだけの客であったとしても、その機会を関係を強化するために用いましょう。待合室や、列を作りながら待っているときでも結構です。新しい友達関係による宝を作り、会話を楽しみ、冗談を言い、歌い、思い出を語りながら、宝を発見しましょう。いい宝が見つかりますように！